


Asian Contemporary Artist  
Solo Exhibition Series I

# Heri Dono

Dancing Demons and Drunken Deities







**Heri Dono**

Dancing Demons and Drunken Deities



**Heri Dono**

Dancing Demons and Drunken Deities

2000年10月14日—11月18日  
国際交流基金フォーラム

主催：  
国際交流基金アジアセンター  
キュレーター：  
アピナン・ポーサーナン

October 14 — November 18, 2000  
The Japan Foundation Forum

Organized by  
The Japan Foundation Asia Center  
Curator:  
Apinan Poshyananda

アジア現代美術 個展シリーズI

# ヘリ・ドノ展

映しだされるインドネシア

Asian Contemporary Artist  
Solo Exhibition Series I

**Heri Dono**

Dancing Demons and Drunken Deities

## Foreword

The Japan Foundation Asia Center is pleased to present, "Heri Dono: Dancing Demons and Drunken Deities," the first of a series of three solo exhibitions by contemporary Asian artists. For our first exhibition, we have invited Apinan Poshyananda as guest curator for exhibiting works created by one of the most prominent artists in Indonesia, Heri Dono.

Heri Dono, born in Jakarta in 1960, is now 40 years old. He has produced a wide variety of artworks, including paintings and installations, performances and events. His work gives new life to the traditional culture of Indonesia in a contemporary context, combining a penetrating and critical approach to political and social issues with a quirky sense of humor. The result is a unique artistic realm that could be described as "Heri Dono's world." His energetic work throughout the decade of the 1990s has earned him a solid reputation in Japan and the rest of the world as a major figure in the contemporary art of Asia.

The curator, Apinan Poshyananda, in addition to teaching art history and theory at Chulalongkorn University in Thailand as associate professor, has been involved in the curation of many international exhibitions of Asian art as a voice effectively representing Asia. Asian contemporary art shows in Japan have often been presented and evaluated from a Japanese point of view, so we hoped that the different outlook provided by a well-qualified Asian curator like Apinan Poshyananda would encourage a broader understanding of Asian art in this country.

This exhibition includes 25 works, ranging from installations and paintings produced by Heri Dono since the mid-1980s, including installations that will be shown in Japan for the first time, as well as new works, made especially for this exhibition, in a gallery space that will be turned into an imaginary temple. The dynamic "world" created by Heri Dono with humor and critical acuity fills the exhibition space with both charm and power. It represents a culminating point in a successful career.

We would like to express our sincere appreciation to Mr. Heri Dono and Dr. Apinan Poshyananda for the tremendous effort they have made in preparing for this exhibition. We would also like to thank the museums, galleries, and collectors who have lent their valuable works of art and everyone else whose assistance and support has made this exhibition possible.

October 2000  
The Japan Foundation Asia Center



ごあいさつ

このたび国際交流基金アジアセンターでは、アジア現代美術 個展シリーズI「ヘリ・ドノ—映しだされるインドネシア」展を開催いたします。これは、アジアセンターが今年度より新しく3回にわたり開催する個展シリーズの第1回目となるもので、タイのアピナン・ポーサーナン氏をゲスト・キュレーターに迎え、インドネシアの作家ヘリ・ドノを取り上げます。

ヘリ・ドノは、1960年にジャカルタに生まれ、今年40歳になります。絵画やインスタレーションなど、多様な作品を発表し、またパフォーマンスやイベントを展開してきました。彼の作品は、インドネシアの伝統文化を現代に生かしつつ、一貫して政治・社会に対する鋭い批評精神を発揮すると同時に、持ち前のユーモアのセンスをもってその精神を作品化し、「ヘリ・ドノ・ワールド」ともいうべき独特の世界を作り上げてきました。90年代の10年間の活動を通じて、インドネシアを代表する現代美術作家として、日本をはじめ国際的にも高い評価を得ています。

一方、キュレーターであるアピナン・ポーサーナン氏は、タイのチュラロンコーン大学で美術理論の教鞭を執りつつ、アジアを代表するキュレーターとして数多くのアジア美術展の企画に関わってきた、アジア現代美術紹介の第一人者です。ポーサーナン氏の起用は、これまで主として日本人の視点から紹介されてきたアジアの現代美術を、日本以外のアジア人キュレーターの視点を通じて評価することにより、日本におけるアジア美術の多様な理解を促すものです。

本展には、ヘリ・ドノの80年代後半から現在までの絵画と日本未発表のインスタレーション、また本展のための新作インスタレーションを含めて約25点が出品され、架空の寺院風の構図をかりて全体がひとつのインスタレーションとして展示されます。批評精神とユーモアをもって、かつダイナミックに展開される「ヘリ・ドノ・ワールド」は、まさしくこれまでのヘリ・ドノの集大成ともいうべき、チャーミングで圧倒的な展示空間を構成することでしょう。

本展の開催にあたり、多大なご尽力をいただきましたヘリ・ドノ、アピナン・ポーサーナン両氏、作品をご出品いただきました美術館、画廊、ならびに所蔵家の皆様、また本展実現のためにご協力賜りました関係者の皆様に、心よりお礼を申し上げます。

2000年10月

国際交流基金アジアセンター



謝辞 / Acknowledgements

本展の開催にあたり、準備の段階から下記の方々、および機関から多大なご協力を賜りました。  
記して感謝の意を表します(敬称略・順不同)。

In preparing for this exhibition, the following people and organizations have given us their generous assistance.  
We would like to take this opportunity to extend to them our sincere gratitude.

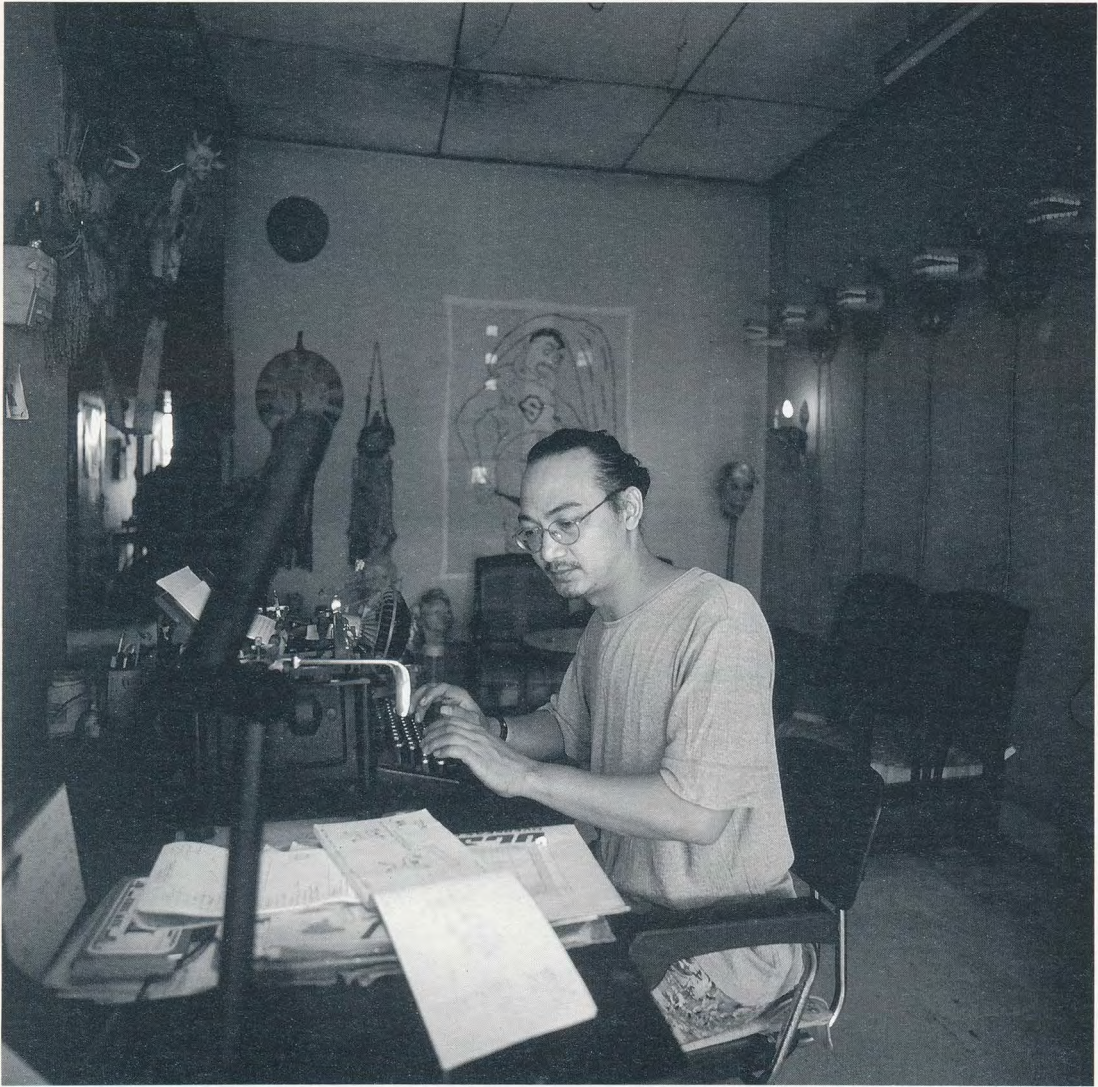
Keiko and Philippe Rochaix  
Oei Hong Djien  
Marc and Esmeralda Bollandsee  
Gajah Gallery  
GALERIE VIA EIGHT  
Queensland Art Gallery  
福岡アジア美術館

Jim Supangkat  
David Elliott  
Sukasman  
Valentine Willie  
Trudy V. Hohl  
Singapore Art Museum  
Moderna Musset, Stockholm  
Museum of Modern Art Oxford



目次/Contents

逆さまの思考でロジックを見つめる [ヘリ・ドノ]	11
ヘリ・ドノ—風変わりなダラン、ジャワの手仕事師、ロー・テクの魔術師 [アピナン・ポーサーヤナン]	15
コンテキスト(文脈) [ジム・スパンカット]	33
ヘリ・ドノのパラドクス—矢と短剣クリス [デヴィッド・エリオット]	41
図版/Plates	49
Watching the Logic through an Upside-down Mind [Heri Dono]	82
Heri Dono: Bizarre <i>Dalang</i> , Javanese <i>Bricoleur</i> , Low-Tech Wizard [Apinan Poshyananda]	84
Context [Jim Supangkat]	98
Dono's Paradox: the Arrow and the <i>Kris</i> [David Elliott]	105
略歴/Biography	112
作品リスト/List of Works	115
執筆者/Notes on Contributors	118



## 逆さまの思考でロジックを見つめる

ヘリ・ドノ

まず最初に私は、社会の思考体系がいかに逆転の発想で巧みに作り出されるのかということを経験してきた。インドネシアの現在の状況を見るならば、ガラス絵の制作過程を眺めている様子に喩えることができるだろう。つまり、アーティストは描こうと思う絵の左右逆の像を描かなければならない。なぜなら、そのガラス絵はのちに反対側から眺められ、結果的にその絵は逆さまではなく正しい向きとなるためである。

逆転した真実、もしくはよく言われるところの「歪曲した論理」は平常の論理や真実が反転し、矛盾しているにもかかわらず、実際は真実であるということであらうに興味深い。インドネシアの文化の中では、すべての事柄が二重的で、また逆説的かつ両義的で、真実と懐疑がいつもせめぎ合っている。このような状況の中では、おそらく人間を漫画の世界に置き換えることも可能である。アニメーションしかり、ボール紙で作った人形しかりである。基本的に社会で信奉されている精神的な柱はアニミズムであり、漫画の概念とほとんど変わりがないのではないかと思う。アニミズムの基本は森羅万象に魂が宿るといふものであるから。

それと同じくして、アニメーションの中でもすべての物が息つき躍動する。走り回る椅子、微笑む涙の粒、踊ったり跳んだりする木など、現実の世界では困難で不可能なことでも、アニメーションの世界では可能なのである。インドネシアで起こり得ないこととは一体なんだろうか？ どうやらすべてが可能のようだ。例を挙げればきりが無い。たとえば、30年ものあいだ権力の座についていたひとりの大統領が、一銭の金をも所有していない。もしくは大きな人が牢屋から忽然と消え失せてしまう。きつとインドネシアからだって消え失せることができるだろう。だから、もし銀行から多額の現金が消滅したとしても、あり得ることだと思う。なぜならお金はとても小さなものだから。

上記の現象はいたって普通のことであり、つまり不条理が真実そのものなのだ。一番難しいのは、現実の中に存在する真実と単なる噂とをいかに見分けるかということだろう。規則という禁止事項や厳しい検閲の下にあったスハルト時代では、特にマスメディアや教育機関の中でそれを見極めることは非常に難しかった。真実を見極める最良の方法は道すがら、もしくはそれが起こった場所で実際に真実を見聞きすることなのである。問題は情報として流されるニュースはすでに政府の利益に従い、変形され編集されていることだ。権力者のよく口にするとところの「国家安定のために」である。このように人生は思想の混乱に満ち満ちている。

創作の過程で、私はたくさんの人々と一緒に作業をしてきた。一般に彼らはいわゆる「普通の人々」である。私が創るインスタレーションの作品、またワヤンなどのパフォーマンスには、多くの人々がその創作に関わっている。電子技術者、機械技術者、建設業者、工芸家、芸術大学のあらゆる学部の学生たち、またベチャ引き、墓掘り人夫まで多岐にわたっている。

これらの作品の創作過程は、彼らとのあいだに活発にやりとりされる対話や相互作用により、非常に興味深いものとなる。芸術のパラダイム、またその土地から沸き起こる独自の表現がひとつの作品として集約されていく。私が単純な、もしくは複雑なテクノロジーを作品の中に使用したのは、テクノロジーを単に表現するためではなく、アニミズムの概念に触発されたためである。創作の基本的なテーマやコンセプトは革新的であれ、発明的であれ、すべて私の個人的な状況や表現の欲求に基づき生み出される。音や動きは絵画の中には使用せず、もっぱらインスタレーション、パフォーマンスそしてビデオ・アートの中に使用している。私の創造する芸術は美の探究のみを目的とするのではな

く、作品を見る人へ新しい意識を投げかけるという相互作用的な行為を意味しているのだ。

社会、政治、暴力、軍事などのテーマは私がおもに手がけているテーマである。これらのテーマの中で、芸術作品はひとつの時代の証人として表現される。インドネシアにおける教育とは、国民を啓蒙するというより、むしろ愚民化するものであり、知性を高めたり、強固な自我を形成するための場所ではないのである。まるで無知を広めているかのごとくである。これこそ、漫画の世界だと言えよう。

いろいろな人々との相互のやりとりをとおして、作品を創作していく過程は多様な思考概念の違いを知るうえで重要な媒介となる。このアカデミズムとは反する方向性は、非公式ではあるが、大衆の知性を高めるうえで、容易に社会に浸透し、かつ普及する方法であろう。確かに、この方法によって、インドネシアではまだ台頭していないミドルクラスを形成することが可能かもしれない。

創作の中に、私は伝統的な要素をよく使用する。それは人々の生活にとっても密接につながっているにもかかわらず、インドネシアの伝統的手法に縛られている表現形態には使われることがない。これらの要素はむしろ弁証法的にその土地を表現し、アーティスト個人の知覚を伝えることができる。伝統は本質的に前進していく文化の触媒として扱われるため、このコンテキストでは伝統と伝統芸術は「博物館」入りし、保存されるものと考えられているのだ。しかし、私自身は伝統と伝統芸術は常に発展し、創造されるものであると確信している。

ジョグジャカルタのプリンハルジョ市場には、伝統的な薬売りの隣で中古の電子部品が売られている。私が部品を買おうとすると、売り子は尋ねる。「お客さん、何かご購入用ですか?」私の辞書の中ではエレクトロニクは「伝統」のカテゴリーの中に入っている。現代美術の問題は、私にとっては伝統的方法論を通じて記号化し解説することができる。たとえば、頭や体のある部分を治す時、足の裏にある神経の中心を治療する中国の伝統的な指圧療法のように。アジアの現代美術は西洋文化を志向しない、独自のパラダイムに基づいているということはよく知られている。たとえば、西洋での遠近法の哲学では、主体と客体の位置をはっきりと区別する。しかしアジアにおいては「曼荼羅」という別の哲学が存在する。そこではすべてが主体と化するのだ。

その哲学は具体的には、ボロブドゥール寺院や、王宮(クラトン kraton)が中心に位置するジョグジャカルタの都市プランの中に見ることができる。そしてそれはジャワの市民生活の指針ともなっている。私のインスタレーションやパフォーマンスは、この曼荼羅の形式とシステムを模したものである。ひとりのアーティストとして私は、政府のイデオロギーに相反し、社会や政治のコントロール役として社会構造の中で重要な意義を持つ、独立した存在がアーティストであると認識している。

《ビダダリ(飛翔する天使)》(1996年、cat.no.8)という作品は、アポロ11号のニール・アームストロングが月に足を下ろす以前に作られた、「フラッシュ・ゴードン」という話にインスピレーションを得て創作したものである。これは人間のインスピレーションとイマジネーションは、時代をはるかに飛び越え先取りするという証明である。ガルダは、自由に自我や知性を形成するうえで、人の力を萎えさせる集団主義でプロパガンダ的な象徴であるが、それとは打って変わって、ビダダリ(天使)は心の開放を謳う私の独自のシンボルであるのだ。

2000年8月5日、ジョグジャカルタにて  
(油井理恵子訳)



